

育てられている時代に育てることを学ぶ②

育っている時代に育つことを学ぶ

—中学生を学びの主体とした「保育教育」実践から—

金田 利子

鈴木 裕乃

はじめに

この連載は、一般教育としての「保育教育」についてとりあげるものです。前回、それは、乳幼児期から青年期までの、生活主体形成、言い換えれば、他者との関わりを通して実現していく「自分づくり」の教育

のことではないか、その本質は、自分自身を育てることも含めて「育てられている時代に育てることを学ぶ」ことを意味するのではないかと述べました。

その教育は、乳幼児期から青年期まで、発達の段階に応じて内容は異なるが、共通して不可欠な教育だといえるのではないかと、その共通性に着眼しました。

つづいて、その実際について取り上げていきますが、今回はその第一回目として、青年前期を対象とした保育教育について取り上げることになりました。中学・高校生が幼稚園・保育園を訪問するのもその一環ですが、学校教育においてそれを担っているのが家庭科の保育にあたります。

とりわけ今回は「自分づくり」の最盛期でもある、思春期といわれる中学生を学びの主体とした「保育教育」の実践者に登場していただきました。

以下は、その実践を展開してきた鈴木裕乃氏の執筆によるものです。

なぜ中学生に「保育教育」なのか？

私は現在、静岡大学教育学部附属中学校で家庭科教師をしています。家政学部の被服学科で学び、教師になって八年目に、この中学校に赴任しました。赴任後、静岡大学の金田先生と出会い、初めて「保育」の

本質に触れ、感激し、新しい「保育教育」を、模索しながら、実践を重ねてきました。

現在中学校家庭科は、二〇〇二年の学校完全週五日制に向け、一年生三十五時間、二年生三十五時間、三年生十七・五時間の計八十七・五時間の学習をしています。そして、衣食住などの、生活自立のための学習と幼児や高齢者、地域の人など、人に視点をあてた学習を行っています。

私は、これまで、「中学生に保育教育なんて要らない！」と考えていました。それは、「今、自分を生きること必死な中学生に、人を育てることを教える必要なんてあるはずがない！」と思っていたからです。「能力管理」体制の進行し始めてきた六十年代頃から、中学生は徐々に偏差値重視の受験競争に巻き込まれ、生きる意味や学ぶ意義を考えることなく勉強を強いられてきました。また、自分の個性に合った学校より、偏差値の高い学校に進むことがよいとされ、それ

に乗ることができなかった生徒は、自尊心を傷つけられ、中には非行という形で抵抗する場合も出てきました。最近では、この偏差値重視の教育は見直され、将来の夢を抱かせながら、進路選択をしていく指導に変わってはきましたが、中学三年生の生徒の心の重圧は、昔も今もあまり変わらないように思います。そのような生徒に、“人を育てる保育”を教える意味などあるはずがないと思っていたのです。

そんな思いを金田先生にぶつけたところ、「それから、育てる保育ではなく、育つ保育、つまり、人は生まれてからどう発達していくのかを扱う保育教育を行ってみてはどうか」とアドバイスをいただいたのです。

この言葉が、私にとってどれだけ新鮮であったか。(そうか、いまを生きることに必死で、大きなプレッシャーを抱えている生徒に、「今」は長い人生の線上の一つの点に過ぎないということをも、“発達”の視点か

ら教えれば、生徒にとって、きっと意味のある学習になる!)と確信したのです。

新しい保育教育・「人の発達」単元

そこで、新しい保育教育として、幼児や高齢者の発達の様子を知り、自分の生き方を考えることを目標にした、「人の発達」単元を構成し、授業実践をすることにしました。この単元を、①「自分を知る」②「幼児を知る」③「高齢者を知る」という、三つから構成しました。

①「自分を知る」では、名前の由来や幼い頃の友達など、家族へのインタビューを通して、自分がどのように発達してきたかを知る学習を行います。授業では、母子手帳や小さな頃の写真を見ながら、和やかな雰囲気大切にします。この学習は、一面で、家庭的に問題を持つ生徒にとっては無理な学習になってしまいうため、生徒の家庭環境を充分把握した上で行います。

②「幼児を知る」では、保育実習を主な活動にし、幼児の著しい発達の様子を知る学習を行います。事前学習として、心と体の発達、遊びの発達を生徒に知らせ、それを実際に見て、確認したり、新たに発見したりする学習を行います。

③「高齢者を知る」では、保育実習の際に知り合った、地域の自治会長さんの協力を得て、実現しました。この学習も、②の学習と同じように、触れ合い活動を主な活動にして、高齢者の発達していく能力を知る学習を行います。

事前学習として、加齢による流動性知能と結晶性知能の変化（覚える知能は低下するが、総合的判断力などの能力は高まること）と社会貢献意識（青年期に比べて高い）を生徒に知らせます。

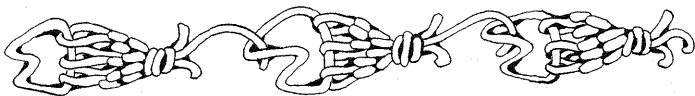
生徒の表れ

①「自分を知る」

「今日、久しぶりに小さい頃の写真を見た。そしたら、もう亡くなっていな
い、おじいちゃんとおばあちゃんが一
緒に写っていた。それを見て、涙が止
まらなくなってしまった」

「自分のわがままな行動の一つ一つを
母が細かくメモに書き留め、それに対
して保育者が丁寧にコメントしてくれ
てある手帳を見て、自分がどれだけ周
囲から愛されて成長してきたのかを改
めて知った。今、自分は悩みが多く、
時にその悩みに押しつぶされそうなる
が、この手帳を見て、それが一瞬でも
飛んでいってしまうような気がした」

これは、「自分を知る」の授業後、
学級担任に提出された日記に記された
文章です。自分の幼い頃を振り返るこ



とで、家族や保育者など、周囲の愛情を再確認し、大きな感動を得たという文章が多く記されていました。それはまさに私の予想以上の反応でした。

中学三年生という時代は、進路決定のプレッシャーを抱え、「孤独」を強く意識する年代です。そんな時に、家族や周囲の愛情に間接的に触れたことで、「孤独」から解放されたのではないのでしょうか。また、反抗期にある生徒は、親の愛情を疎ましく思う時期ですから、日頃の尖った心が、ふわっと柔らかくなったのかもしれませんが。さらに、義務教育最終学年であり、中学校生活のゴールを意識し、周囲への感謝の気持ちや、素直に湧いてきたということも考えられます。これらのことが授業の内容と重なり合って、大きな感動が生徒の心に起こったのだと思います。

②「幼児を知る」

事前学習で、生徒の多くが最も関心をもったこと

は、「遊びの発達」でした。社会性などの心の発達にともない、一人遊びから並行遊び、集団遊びへと発達していくことに生徒は大変驚いていました。

保育実習では、幼児と触れ合いながら観察することを目指に行いましたが、実際は冷静な観察などできず、生徒は、笑顔いっぱい、自己主張の強い幼児と徹底的に遊び、くたくたになって実習を終えました。

そんな様子を見て、私は内心、観察は無理だなど思っていました。しかし、帰路では「楽しかった」「疲れた」を繰り返しながら、「並行遊びって、本当にあるんだね」「五歳の子はルールのある遊びができる」「四歳では性を意識する。男の子は男の子同士で遊んでた」など、事前学習の視点について、多くの発見をしていることがわかりました。そして、事後学習では、幼児について様々な発見が活発に出されました。

次の文は授業後の生徒の感想です。

「二年生の時、ボランティアで行った時は、ただ遊ん

できただけで、遊びの違いなど全く気づかなかった。それが、今回の実習では、授業で習ったことを確認できたと、また個人差があることにも気づいた」

「幼児は自分の好きなことをして個性がはっきりしていると思った。僕たちは今集団遊びが多いけど、時には自分が好きなことをやることも大切だと思った」

「とにかく保育実習に行つてよかった。すごく楽しかった。次回の母園実習（学年行事として自分の卒業した幼稚園・保育園で実習する）も楽しみです」

「この実習で友達によさに気づいた。友達がいつもと違う感じで幼児に接していた。私の夢は保育者になること。その夢への気持ちが増えた」

「ずっと遊んでいた女の子が『今度うちに遊びに来ていいよ。動物園に連れて行ってあげる』と言ってくれた。なんだか涙が出るほど嬉しかった。その言葉は僕を認めてくれた証拠で、僕が役に立ったってことだと思つたからだ」



▲幼児と触れ合いながら観察する

「自分にもこんなかわいい時期があったと思うと不思議な気がした。自分も同じ道を通ってきたのに、今になって見ると幼児の成長の様子がよくわかる」

このように、保育実習では、生徒は、今の自分と接した幼児とを照らし合わせて、自分を見つめ、また、自分の成長過程を知ることができました。

③ 「高齢者を知る」

生徒の高齢者の認識は総じて「老いて衰えた人たち」です。しかし、結晶性知能や社会貢献意識は高いことを事前学習で扱い、それを実感できる高齢者との触れ合いの場を設定したことで、高齢者像が驚くほど変わりました。来ていただいた高齢者の方は民生委員や保護司、自治会長など、何らかの形で地域社会と積極的に関わり、生き生きと生活している方達です。

生徒は、保育実習の時とは違い、初めは戸惑い気味でした。しかし、高齢者の方のリードにより、次第に

慣れ、真剣な眼差しで話をじっくり聞く様子が見られました。事後学習では、「あまりに元気で驚いた」「総合的な判断力は確かに高いと思う。いろんな経験をしているからかな」「高齢者は隠居して、孫の世話をするのが生き甲斐だと思っていたが、決してそれだけではないな」などの意見が挙げられました。

そして授業後、生徒はこのふれあい体験を感動的に記していました。

「介護保険制度がスタートし、お年寄り⇨助けられる人というイメージがあったが、今回の体験で、そのイメージががらっと変わった。短い時間だったけれど、本当にいい体験だった」

「僕の祖母もそうだけど、高齢者は一度決めたことは最後までしっかりやると思った。何でもすぐにやめてしまう僕には、そのことが一番印象に残った」

「親とか身近な大人に言われるとカチンときて、素直に聞けないことが多いのに、今回はなぜかとても素直

に聞くことができ、自分でも驚いている」

「自分の祖父母と話す時より、話がかなりはずんだ。いろんな趣味を持ってたり、ボランティア活動をしていたり、外に出ていろんな体験をしているからだろうなど思った」

「家のおじいちゃんやおばあちゃんはいつも家の仕事をしてくれている。でも、今日話を聞いて、もっと社会に関わった方がよいと思った。—中略—板津さん（高齢者）を見ていて、うらやましくなった。今、私には夢中になることがない。今の自分はつまらない生活をしているような気がした」

「私も自分が高齢者になった時、パワフルで生き生きしている印象が与えられるおばあちゃんになるぞ」



自分や自分の家族のことだけでなく、地域社会のために、自分でできることを積極的にに行っている高齢者に触れて、生徒は、自分と自分の祖父母の現状を見つめることができ、また、未来の自分の理想的な高齢者像を描くことができました。

私自身も、自分の祖母「っしか」関わりがなかったために、高齢者になることに、正直、明るい希望を持つことはありませんでした。しかし、今回の触れ合い体験を通して、私自身も高齢者像が大きく変わりました。自分もそういう高齢者になれるよう、今から意識して生きていきたいなど強く感じたのです。

この高齢者との触れ合い体験は、これから続く生徒や私に、人生の先に明るい見通しを与えられた、貴重な機会になったと思います。

「人の発達」単元の授業を終えて

この単元を実践し、生徒は、自分と幼児、そして

高齢者を「発達している人」と捉え、母子手帳や幼児期の写真をみたり、保育実習や触れ合い活動を体験したりすることを通して、実に多くのことを発見をしながら、自分の生き方を考えることができました。

以下は、単元終了後の生徒の感想です。

「幼児や高齢者との触れ合いのおかげで、人生のうちの一時として今の自分をみつめることができた。高齢者の誇りに思っている人生を聞かせてもらい、今、中学生の自分に満足がもてるかを考えてみた。答えはnoだった。正直このまま卒業まで流れに乗っていきそうな自分だった。それに歯止めがかかったと思う」

多感で敏感な中学三年生のこの時期に、家庭科の授業で、このような思いを持たせることができる、この「人の発達」単元の価値や意義に自信をもち、今後、さらに検討を重ね、実践していきたいと考えています。

(以上鈴木)

おわりに

この報告に執筆者自身がつけたテーマに目を向けてみたいと思います。「育っている時代に育つことを学ぶ」となっています。人を「育てる」という前に、自らが育つというところを強調しています。そして保育の授業を「発達単元」と捉えなおしています。

この実践からは、今だけで自分を見るのではなく、長期の展望の中で、命のつながりのなかで自己を捉えるという営みを通して、「自分づくり」をすすめているという特長を見いだすことができます。

授業の構成は、①「自分を知る」②「幼児を知る」③「高齢者を知る」という順序にしています。しかし、これらは相互にかかわっており、幼児や高齢者という異世代と関わり異世代を知ることを通して、発達過程の見通しの中に中学生という時期の自己を位置づけ、発達のつながりの中で「自分を知る」というと

ころに発展しつつ還元してきていることがわかります。具体的には、「幼児を知る」や「高齢者を知る」という授業の感想においても、自分自身の発達とかかわらせて学んでいることに表れています。

「自分を知る」ということは、思春期・青年期にある中学生の「自分づくり・自分育て」をしたいという発達のな要求に応えるものとなっています。このことは、前述の報告のなかにあるように、保育の授業後に自己を見つめる姿を担当に毎日提出する日誌にほとぼしるように書いている点からもわかるように、家庭科での保育の授業が生活の主体としての自己洞察・自分づくりに発展していることから見いだされます。

中学生からみたとき、この授業は、「育っている時代に育つことを学ぶ」ことを意味しています。しかし、そのことは、客観的にみたととき、他者を思いやり、自己を育て他者と共に、育ちあうことの意味を知るといふ点で、この授業を通して、まさに「育てる」

ことの基礎を学んだのであり、「育てられている時代に育てることを学んで」いるのだということがわかります。

発達單元としての保育の構想をもっとすすめていくとき、乳幼児期から高齢者までという個体発達のつながりの中で、自己を捉えるだけでなく、それは延々とつながる人間生活のライフサイクルの中ではもちろん、さらには三十五億年から四十億年の歴史を持つという、地球上の生命のつながり、即ち系統発達の中でも位置づけていくことができるのではないのでしょうか。

中学生は、個体発達からすると確かに十三歳から十五歳ですが、系統発達から見ると、三十五億年～四十億年～十三歳～十五歳であることに気付くとき、命の重みと、育ちあうことの意味をいっそう豊かなものにするのではないかと思われるからです。

(静岡大学教育学部・同附属島田中学校)